

天正十二年四月九日

九四六

ト號スル也、享保十八年癸丑四月廿五日、繼政朝臣始テ社參、同十九年甲寅五月二日、吉泰朝臣始テ社參、同二十年乙卯二月、笹瀬彌三郎願主ニテ、京都吉田殿ヨリ信輝靈神號免許、二月十九日、整修靈神ノ神號ノ宣旨有之、

因州加藤氏覺書ニ、信輝君ノ守本尊觀音、尾州喜多村カンフク寺ト云真言寺ニアリ、御守神ハ、江州檜尾大明神ナリ、

〔池田氏家譜集成〕

三十 龍德寺略記

龍德寺在美濃國池田郡本郷、禪宗、屬妙心寺、

護國院殿碑銘

安永六年丁酉十二月イ二十一月、濃州池田郡本郷雲門山龍德禪寺月澗座元、使其法眷溫宗座元遠來我寺曰、我聞之古老、當國太守池田侯曩祖代代居我郷、故以池田爲姓、天正十二年甲申四月九日、信輝公（元下阿比）之助公戰死於尾州長久手原、葬遺骨我山、稱三本櫻之地、建石碑二基於其上、號信輝公護國院殿雄岳宗英大禪定門、號之助公顯功永節禪定門、年代遼邈、雖露侵苔蝕、而碑字炳然、傍有小石碑、相並累々焉、古老云、是皆池田侯家臣殉死於尾（號テラシ）之役者之碑也、剝苔見之、碑

美濃龍德寺池田氏美濃池田氏居リ池田ス

美濃池田氏居リ池田ス

攝津池田氏居リ池田ス

字或明或滅却、後六年（天明三年）、當兩君二百年諱景、然兩君戰死之時、列國相爭、人無一日安也、故兩碑雖設巍然、松檜草莽之間、唯樵牧憩止、狐兔竄伏、我慨之久矣、又前住石點在任時、本國加納前城主安藤右京亮家臣原庄内、與當國山田市郎左衛門有故耶、以書信、竊詢舊址眞蹟來、石點亦區區告諭、端由時無、故唯加古墳一層臺石而已、前後累代往往欲訴當國、或不幸不果、或企思不及、今欲兩碑之傍、遠之以石欄、周之以垣墻、若夫忠死者二十餘員、爲其後者、各擲方金數顆、備香華之供、而收取之、以新造立墳塋、將經營諱景、就中造立片桐與三郎者之碑一基、其餘合作一大石碑、名之謂烈忠碑、而傳之百千年後、欲使人是知池田侯曩祖及家臣之碑、雖然我寺近罹鬱攸災二回、寺產本乏、厨庫寥寥、實懷微志、無可造之力、請師達之當國宰臣、寄捨淨財、令成我願、予曰、我住此寺日淺、故當國大守家系未能委悉、嘗粗聞之、當家曩祖居攝州池田、故以池田爲姓、而兩地同名不知何是、而濃與尾接壤、則葬兩公遺骨於今之地也明矣、因以溫宗座元所語并古來筆記及其物件達之官廳、於此宰臣評論數回有議而罷焉、其後月澗座元自來、又使其法眷芳州座元來、如是三次、其議難變、終空歸、同己亥（安永八年）

天正十二年四月九日

九四七

天正十二年四月九日

九四八

備前因幡
池田
氏資ヲ捐
テ、碑ヲ
修理ス

之冬、月澗座元輔翼桂禪衲、持當國宗祖輝政之印券來、告訴不已、予復聞于官廳、以其意勤、及此幸臣以其印券與告諭再議、雲霧一時披、則桂禪衲又走因州、訴以此事、因侯亦以當國之議爲準而聽納焉、(安永九年)庚子之春、兩國出白金若干、以充其修碑之費、月澗座元夫喜曰、惟非成我志、累代求願共享矣、速經營之、且欲碑後記此事、以留於後世、請師銘之、予與聽此事、故不得拒辭、仍題燕詞曰、

池田家胤 千有餘年 蘭孫桂枝 相連綿綿 中葉已來 自攝濃遷
輝公父子 英氣昂然 杖策軍壘 往事織田 織田遭害 羽柴冲天
父子相從 膠漆堆堅 摧勁折銳 誰敢爭先 惜長久手 沒命九泉
葬骨斯地 設碑山嶺^(嶺) 星霜二百 草萊芊々 遠裔何在 備因芳聯
玆奉白金 以垣四邊 香火日日 請供新蘇 神靈不已 嚴臨法筵
鎮護家國 災厲長蠲

維時天明三龍集癸卯四月九日備前城南蘭若萬歲山國清禪寺現住嵩梅溪謹識

二百年忌

天明三年癸卯四月九日法會執行品目 日ノ中略、八日及、カ、ビ、ル、

右美濃國於雲門山龍德禪寺、修法會、此時備前國清寺梅溪和尚出頭、及濃州近鄉之同派十餘ヶ寺大衆三十餘員、都合五十有餘、僧名員略之、

因幡御代香 佐藤清右衛門
備前御代香 梶浦吉兵衛

御廟討死之面々同會位牌之圖 黑塗金紋

列名之次第、於御廟前月澗和尚讀經念誦畢、而使幼僧取紙圖、定先後由也、

- 梶浦兵七郎 ○ 鱸 藤 治 ○ 古田 甚 内
- 臼 井 藤 丸 ○ 今 井 長 三 郎 吉 ○ 河 越 次 郎
- 蟹江勘右衛門 ○ 秋 田 加 兵 衛 十 郎 ○ 河 村 助 之 丞
- 大 村 定 平 ○ 生 駒 半 左 衛 門 ○ 村 岡 十 内
- 佐藤又左衛門 ○ 香 西 又 市 ○ 長 谷 川 傳 三 郎
- 竹 村 小 平 太 ○ 梶 田 喜 八 郎 ○ 森 嶋 八 藏
- 烈 忠 靈 同 聚 ○ 鵜 飼 喜 右 衛 門

天正十二年四月九日

九四九

天正十二年四月九日

九五〇

牌裏誌當時之施主各交名一膳、並畫各家紋、依牌名之次第張燈亦各畫家紋、
記施主云云、

〔池田氏家譜集成〕

三十尾社緣起

池田家御由緒御尋ニ付、御答奉申上候、

一 檜尾大明神者、池田勝三郎信輝侯之御產地神ニ而、御社御造立有之、則棟
札左之通御座候、

天正八 庚辰年十一月廿八日

奉造立檜尾社

願主 池田勝三郎信輝

社僧 阿闍梨隆榮

大工 佐兵衛重輝

社家 小川官大夫

右勝三郎様後ニ勝入様与奉申候様承傳候、則當村之御産ニ而御座候處、
後尾州ニ御越共申、又濃州ニ御越共申傳候、何レ兩國之内ニ御移リ之御
様子ニ御座候、

〔池田氏家譜集成〕

三十尾社舊記

檜尾大明神ノ産ハ勝入ノ神ハ勝入ノ社ヲ造立ス

近江池田ノ産ハ勝入ノ社ヲ造立ス

宗源 宣下

池田氏信輝亡魂

整修靈神

右宜授靈號者、

神宣之啓狀如件、

享保二十年二月十九日

神部壹岐宿禰奉

神祇道管領卜部朝臣

奉納整修靈神寶前願書

池田紀伊守信輝公者、尾州之英産、姓源、本出于攝州池田郷、因以為族氏、壯歲
昵近於贈相國信長、而著武威于當時、震美名于後代、及晚年傾心于禪門、薙髮
染衣、號勝入公、于時關白秀吉與神君爭兩雄、有尾州春日井郡長久手原之戰、
於是勝入公直赴于戰場、馳馬橫戈、左提右擊、終討死、實天正十二年甲申四月
九日也、其御首有故而埋藏于遠州新居、墓上安置叢祠、經星霜而奇異甚多、土

天正十二年四月九日

九五二

整修靈神

新居ノ叢
祠ヲ修理
ス

天正十二年四月九日

九五二

民郷人至今崇之至矣盡矣、及享保二十年二月十九日、奉號整修靈神、至寬延
年中、小叢祠甚以破壞殆爲荒原、故同姓池田氏諸君、自寬延三年三月十八日、
經營于土功、爲新初、同年十一月祠成、同年十二月十二日、修遷宮之禮、祭祀如
法、雖然欠鳥居、故今建立鳥居、仰神德、於呼靈感、影應、懇禱、響通、冀神護于池田
氏之武門者、後代之幸甚乎、

寶曆二壬申二月九日

池田修理政倫謹誌

勝入ノ母
ハ信長ノ
乳母

〔十竹齋筆記〕

三

一勝入ノ寺ハ、妙心寺ノ内護國院也、四十年前同回祿、癩
シケル、勝入ノ母ハ、信長公ノ乳母信長ト勝入ト兄弟也、妙心寺ノ内桂昌院ハ、母
ノ寺ナリシユヘ、信輝百年忌、備前伊豫縣兩家ヨリ、桂昌院ヲ大ニ建立シテ法事
アリ、

勝入、秀吉公、信雄ト取合ノ時、何方ヘ附ヘキヤトアリケレハ、家老伊木清
兵衛云、子孫ノ榮ヲ思ハ、秀吉公ヘ附給ヘ、義理ヲ思ハ、信雄ヘ一味ア
レト云、秀吉ヘ一味故、子孫榮

〔花押彙纂〕

部イ之

池田恒興

勝入ノ花
押

池田恒興
恒興

○塚本文書(備前)
天正十年六月廿七日附
高山右近助宛惟住長秀
羽柴秀吉柴田勝家連署
書狀

○興正寺文書(山城)
天正拾年十月日附攝州
塚口宛制札

天正十二年四月九日

九五三

天正十二年四月九日

九五四

○勝入、信長ニ從ヒテ、伊勢大河内ヲ攻ムルコト、永祿十二年十一月十一日ノ條ニ、攝津花熊城ニ荒木村重ヲ攻ムルコト、天正八年閏三月二日ノ條ニ、花熊城攻落ノ功ニ依リテ、信長ヨリ攝津ノ地ヲ與ヘラル、コト、同年七月二日ノ條ニ、秀吉等ト議シテ、神戸信孝ヲ迎フルコト、同年六月十二日ノ條ニ、山城山崎ニ明智光秀ノ兵ト戰フコト、同月十三日ノ條ニ、秀吉、柴田勝家等ト、尾張清洲ニ會シテ、信長ノ繼嗣ヲ定メ、其遺領ヲ處分スルコト、同月二十七日ノ條ニ、京都ニ入り、清水寺ニ陣シ、尋テ、攝津ニ歸ルコト、七月五日ノ條ニ、秀吉、丹羽長秀等ト、京都本圀寺ニ會スルコト、同月二十八日ノ條ニ、大坂城ヲ秀吉ニ致シ、美濃大垣ニ移ルコト、同一年五月二十五日ノ條ニ、稻葉一鐵ト疆域ヲ爭フコト、同年十一月十三日ノ條ニ、信雄ニ背キテ、秀吉ニ應ズルコト、同十二年三月十日ノ條ニ、勝入ノ兵、森長可ト共ニ尾張犬山ヲ拔クコト、同月十三日ノ條ニ、秀吉、自ラ美濃ニ出陣セントスルヲ勝入ニ報ジ、其準備ヲ爲サシムルコト、同月二十日ノ條ニ、秀吉、勝入ノ母養徳院ニ書ヲ與ヘテ、勝入ニ尾張ノ地ヲ與ヘンコトヲ報ズルコト、同月二十三日ノ條

元助ノ畫像

ニ見ユ、

〔池田元助畫像〕

○美濃龍徳寺所藏

池田勝入公嫡男名之助、公后加正宗寺殿、夫顯功永節禪門影相者、年代深遠而不詳其威容、然應月澗和尚求、感想幼齡面貌、模索衣冠彩光、強操筆以擬眞影、而備二百年嚴諱追善者歟、謹和歌一章竝書其首而寄附濃州池田郷雲門山龍徳廟寺者也、

た乃りとの志らてぬまほし面影を寫し繪をうら猶忍ふらし

天明二壬寅十月日

備前天城領主遠孫池田主稅政喬自誌乎

付授月澗和尚

〔伯耆志〕

○上元助 會見郡入 *子下 田邊氏 私稱之姓、

略 正宗公の御木位及ひ以降の位牌、總泉寺に祀れり、

正宗寺殿顯功永節大居士

天正十二甲申年四月九日

〔花押彙纂〕

部イ之 池田元助

天正十二年四月九日

九五五

元助ノ位牌ト法號

天正十二年四月九日

沈田儀九郎

元助

○余田文書(鎌律)
天正拾年十二月
廿八日附湯山年
寄宛寄進狀

九五六

沈田儀九郎

元助

○善福寺文書(鎌律)
天正拾壹年五月一日附阿彌陀
堂宛安堵狀

○元助、攝津ヨリ美濃岐阜ニ移ルコト、十一年五月二十五日ノ條ニ、信
長、信忠父子ノ冥福ニ資セントシテ、美濃崇福寺ニ地ヲ寄スルコト、同
年九月十七日ノ條ニ、森長可ト共ニ、尾張犬山ヲ拔クコト、十二年三月
十三日ノ條ニ見ユ、

天正十二年四月九日

九五七

〔森家系圖〕

磨○播

長可ノ略

可成

幼名三左衛門、生國美濃、住同國金山、初

長可

世誤稱長一、勝藏、從五位下、武藏守、任信長公、賜

天正二年

甲

七月、長可從信長公攻伊勢國長島城、一

向宗

討取首二十七

級、關小十郎右衛門等同相從、同三年

乙

五月、長篠合戰、長可從信忠卿進

先陣、有軍功、同十年

壬

二月、長可從信忠卿擊武田勝賴、到信州伊奈時、小

笠原掃部信嶺在松尾城乞降、且請求檢使、以勵軍忠、信忠卿遣長可及團平

八招之、小笠原信嶺揚燧以應焉、伴西保科越前守在飯田城、城兵不戰逃去、

長可聞之急追擊之、獻首三百餘級於信忠卿、信忠卿到飯田、道遙軒等恐懼

避大島城、逃歸甲府、信忠卿進兵赴飯島、長可爲先登振猛威、甲信兵畏服、進

攻高遠城、城主仁科五郎信盛及軍將小山田備中守力戰數回、死者多矣、信

忠卿自指揮士卒、長可急擊之、備中振勇不成、遂敗走入城、信盛及備中等皆

死城陷、斬首二千五百八十級、殘兵逃歸甲府、其後使織田源三郎勝長及長

可、團平八等赴上州、小幡上總介信真出質降參、信長公賜信州更科、四万五千五百

石餘、高井、六万七千五百、水內、七万六千、埴科、二万二千、九、四郡於長可、居

松城、長可築海津城欲居之時、近邊一揆等一万餘人攻之、長可以兵三千戰

破之、得首二千餘、芋川某逃籠于大藏古城、長可襲之、得首千二百餘級、彼是

三千餘級獻之、信忠卿賞之、賜感狀、○中略、天正十年四月十一日附、信忠感狀

同年六月、長可有信州、聞信長公被弑、即欲上洛、先是春日周防守等出質在

長可館、至此春日等告長可曰、君欲入洛可早返質、不然則國士以兵追之、或

要君於路次、長可怒曰、信長既死、汝以我爲弱故其言如此、不敢返質、汝等今

叛我、擊之、○甲信長公也、我首途在近日、汝等何不攻我乎、既而長可卒諸士所

出之質而進發、國中一揆等路次處々要之、長可自持鎧擊破之、所從之壯者

馳馬急擊之、故長可遂越大河、一揆自猿馬場引兵歸去、其晚長可自持鎧、文十

字、突殺春日周防子、其餘質者到松本、與木曾易質云云、同十二年、甲春、信

雄有欲滅秀吉之志、故遣使于池田勝入、長可請之、以後援、先是秀吉遣津田

隼人言于勝入曰、可領美濃、尾張、三河、又使尾藤甚右衛言于長可曰、可領遠

江、駿河、無敢以違焉、且有誓言、長可曾在岐阜、從信孝卿有恨事、退岐阜、故今

亦屬秀吉公、同三月十五日、長可三千餘騎陣于羽黑、十六日未明、家康公使

酒井左衛門忠次、與平美作守信昌、松平紀伊守家信等五千人、襲長可陣擊

天正十二年四月九日

九六〇

其不意、長可敗走、同四月、池田勝入議曰、敵兵大半在小牧山、參河其可爲空國耶、潛兵亂入、則小牧敵敗走乎、秀吉諾、勝入父子、長可及三好孫七郎秀次、堀久太郎秀政卒兵入三州、攻岩崎城、城即陷、家康公使大須賀康高、榊原康昌、(多)本田康重、水野宗兵衛、丹輪勘助氏次爲先陣、與三好秀次、堀秀政相戰、三好秀次、堀秀政敗北、退到樂田、長可進兵、怒先日敗于羽黑、且此度軍不利、欲爲討死時、家康公率井伊万代直政等兵四千、爲三州、積弩亂發、火砲頻飛、長可磨軍先衆進、時砲中長可眉間即死、二十關小郎右衛門同討死、其外細野左近、原助兵衛、田染三十郎、井上半左衛門、郎從四十餘人討死、諸軍大亂、勝入父子亦力戰死、時四月九日也、長可無嗣、秀吉公使舍弟忠政繼其遺跡、且因爲幼少、使林新右衛門居金山、各務兵庫助元正居岩村、林長兵衛忠政傳、

〔森家先代實錄〕

○四播磨 長可君可ノ字ニ作ル一

御幼名 勝藏

御官名 武藏守

一永祿元戊午年、濃州羽栗郡蓮臺よて生れ給ふ、

一天正十一癸未年、眞屋前新助へ被下御自筆之御書、

長可ノ書
狀

つは無異儀のほり候由尤候、宗意のさういへ被越候由、定而其方も可爲其分候、此方之事先日之のちかゝる事無之候、可心易候、隙明次第宗意同心よてくさり候へく候、心もどかきとて一人下候事、返々くせ事さるべく候、又其方てつほうの者つは内喜太郎こまつ預候、惣別其方のほろをさゝせ、我々そえこ可置候間、此度あり縁、志ろき縁り少可爲調候、しほし、

三廿三

御判

返々、ほろ可申付候間、其心へ候へく候、たゝ今ありまを見出し候間、則申付こしらへさせ申候、とらせ候へく候、其方にてとゝのへ候事無用にて候、二兵衛りる事あくして、いとやせつうく道にて、彌きもいり候へど可申候、しほし、

新助殿

む

一天正年中の比、度會永弘神主といふ者、淀船に乗んどせしよ、先こ乗さる武家の郎等と見へて、急ク船也、乗せまじたと云ど、兎角して乗こり、然

天正十二年四月九日

九六一

天正十二年四月九日

九六一

るに永弘より僕と、彼郎等いさうひて、威勢ケ間敷旬ルまゝ、永弘立腹して、神木ヲ以て打んとす、船中の人立サワキテ取とめたり、扱一二りも船行ぬるよ、堤の上こ其勢百餘もやあらん、皆黒羽織ヲ著り、武器數多持せざる人の、床机は腰ヲ懸給ひさるる、使ヲして其船留よといふの、何事からんと思ふこ、彼使者云様の、堤こ居申候の森勝藏也、先こ太神宮の御師へ無禮をしさるの我者也、腹立のやむ様は如何こもまへしとの使也、永弘急キ船より上りて堤こ行、畏テ申々るの、御意忝候へ共、太神宮の御師と申の、ケ様の事こ行り、て、餘所の事あり共御詫言申上るの作法よて候、増テ我等の身の上より起りさる事よて候へ、御免下され候へと申々れ、勝藏殿被仰々ほ、多年太神宮ヲ信仰し奉る處こ、我下のヤツバラ無禮の其恐あるの間、殺へきと思へと、其方の詫申さるゝヲ、兎角云も無禮也、免スと被仰さる時こ、御禮申て急キ船こ歸りたる、何とて知り給ふさるそや、堤より見給ふり不審也と、永弘昔物語シキ、山口信濃家記

長可大神宮ヲ信仰ス

長可ハ大鼓ヲ習ヒテ手ノ指破レ居タリ遺骸ヲ可成寺ニ葬ル長可ノ法號

一長可君御遺骸、戰場こ打捨有たるが、合戦の後相尋候得とも、死骸數多かれ、相知兼候處、厩別當野呂又助義を、御馬ヲ召候節、常々御側近ク寄申候故、日記(頃か)大鼓被成候て、御手の指破レ居候ヲ存居尋出し、四月十三日、金山へ取歸候て、千本藏よて火葬よし、御骨ヲ大龍山可成寺こ葬り、則御石塔有り、

- 前武州大守鐵圍秀公大禪定門
- 本源寺ニ御位牌アリ、
- 雄心院殿前武州大守鐵圍秀公大居士
- 三玄院ニ御位牌アリ、
- 東源院殿前武州大守金英宗剛禪定門
- 武州下谷圓満山廣徳寺ニ御位牌アリ、
- 東源院殿前武州大守金英宗剛大居士
- 内記君御佛殿ニハ、
- 泰心院殿鐵圍秀公大禪定門

一長可君御武具

- 御刀、長光、貳尺三寸
- 御脇差、了戒、一尺三寸
- 御胄、象の鼻よて手木ヲ卷さるヲ、信州高遠城攻の時、信忠卿より御拜

武具

天正十二年四月九日

九六三

領、

御桐、其外共ニ銀萌黄糸威、

纒、白中ニ朱ノ餅出し、銀の角取帯、

馬印、銀の爪黒鳥毛の出シ、三左衛門君御代より黒キ三ツ鬼灯よて候

處、天正三年、長篠合戦の節改ル、

昇、白地ニ十ノ字、右同斷、黒白の左卷、まゝた茜にて候處改、

長柄、黒鳥毛、上金下黒塗、

家中前立物、金の牛の志、

家中番差物、黒絹、長五尺、貳本志あへ、

士大將、番頭、足輕大將、諸奉行差物、金よて銘々好次第、

使番赤纒十人、黒纒十人、但母衣紺ニ幅三寸計の白キ筋二筋、黒赤とも

同様、出シハ銘々好次第、

一或時長可君仰らるゝの、馬口勞の馬ヲ能見、鷹師の鷹ヲ能見、犬すたの

犬ヲ見知、人もまゝ言葉立振廻行座ニ能心ヲ付の、見へざる事のあり

らんと被仰しと也、

一濃州江場田村貴船大明神、長可君御氏神と云、

一長可君御短冊、

三芳野、山をかすゑてしら雪のぬりよしさと春の來にたり

一濃州金山ニ、自考齋と云富人有り、或時士中へ語りしに、士といふ者の陣

虎口ニ臨んで、打死と心懸る事あらんと存せしに、長可様の御家來よ

も討死と覺悟の士あしと云、若士是ヲ聞、きつくまいこ思ひ、誰う士さら

ん者、殿の御馬先よての埋草こもこ心懸、生て可歸と思ふもの取しと

云、其時自考齋聞給へて證文ヲよむ、

今度荒木攝州依謀叛、上様彼表へ御發向也、就夫殿様爲御先手近日御

出陣也、近比御無心千万ニ候得共、金子五六兩御借頼存候當暮無事歸

陳いゝし、元利共返辨可有之、

と有之上の、討死の心懸のあたと存る也、某存候の、今度御先手の御供也、

某の討死可致身、太郎、おと八等ニ申置候間、諸道具ヲ以あり共可遂、算用

氏神

長可ノ家
臣山ノ家
富者ヨリ
金子ヲ借

天正十二年四月九日

九六六

と書て社頼母敷可存と云しどりや、又或時美濃士を齋藤龍興乃時代と替り、武邊嫌ひにあらまやつと、土田口も足場悪し、香々美野青野原口も場廣クして少人數よて防うと、江渡口の大河故引取悪しと、教地くんぞやう計也、然レハ武篇嫌ひと見ゆる也といひしと也、

一美濃國可兒郡帷子庄石原村普傳山眞禪寺、古ハ不傳山、後改普傳山ト云トイヘテ、長可君の御菩提寺とるのよし、其故ヲ以文化四丁卯年夏、住僧敬州和尚目見願として赤穂こ來ル、同年秋八月十八日、村瀬林左衛門江戸よりの歸るさま、右眞禪寺へ參詣いさせし也、眞禪寺の人皇四十四代聖武天皇の御宇天平年中、文武皇帝大寶中、行基菩薩開基の靈場ト云、天正十一癸未年、住僧大圓、金山城主長可君方丈建立し給ふ、後寺領八貫貳百六文、外ニ山七拾六丁通り寄附セラレ、菩提寺とるのよし、即チ天正十一年六月廿二日、長可君の寄附狀ヲ所持す、長可君の御葬式の節、法語も有し處、觀音堂炎燒の時燒失すと云、御位牌有之、

前武州太守鐵圍秀公大居士

神儀

御位牌の正面ニ鶴ノ丸の紋アリ、百五十回忌の節、拵直セシ位牌の由にて、厨子ニ桐臺の紋有と也、桐臺ハ忠政君ヘ太閤ヨリ、賜リシ紋ナル、誤リナリ、扱御葬地の境内觀音洞と云所よて、墳の前ニ小キ五輪數々土ニ埋レ有之、是ハ黄泉の供しとる士ヲ墳前一ツ穴切埋し印の五輪とてもあらんやと云、然ル所特山和尚住職中、天明四辰年霜月廿四日、落葉ニ埋伏するヲ以、境内若林と云所へ、長可君の御墓土三尺ヲ取て改葬すと云、長二尺四五寸計の五輪の石塔を初、依之觀音ヶ洞の古跡年ヲ經て紛亂まへま様子どりや、勿論可成寺御葬地かれ共、眞禪寺にも御分骨、又ハ御肌ヲ付し品ニ而も葬し事よもあらん哉、大切の舊跡、其儘捨置候て、年ヲ經て自然と舊跡も消へ、且山人等の經路ニあらん事も勿躰かれ義、必舊跡乃不失様ニ石ヲ置吳候様、住僧へ頼置かれ、同年冬、假ニ石ヲ志つら、置候旨申越、猶亦翌年二月七日、數々有し五輪、長可君ヲ中央ニいさし、左右ニ五輪からへ、尤五輪掘集し所廿五六躰も有て、貳尺程もほらせし所、藥のかゝらざる皿のうけ四ツ五ツ出しの、二百年以前との、二三尺も埋レ候様子ニ有之

天正十二年四月九日

九六七

天正十二年四月九日

九六八

旨、敬州和尚方申越し候也、但菩提寺墳墓等猶亦識者の説ヲ俟ツ云、右於真禪寺、當村住人森三右衛門と云者并悴庄藏と云者ニ逢、三右衛門咄しニ、長湫御討死の舊跡ニ、二十ヶ年以前、森武藏守討死の所、池田勝入討死の所ト云石碑ヲ、尾州卿より建られしと語々候と云也、

可成寺

〔森家先代實錄〕

○十八 播磨

一金山可成寺の、長可君御代、元龜二年辛未金山の

城の東の山上、可成君御菩提の爲一寺建立して、大龍山可成寺と云、榮巖和尚開基とす、御石塔造立有之、其後忠政君御代信州川中嶋へ國替の後、可成寺の住持見陽和尚今の寺地に移せし由、前の寺跡ヲ所のもの寺ヶ峰ト云由也、可行君、長可君の御葬地也、天和三癸亥年、可成寺へ長武君御參詣、可成君御齋領五人扶持寄附せらば、五月廿二日の事也、

長可ノ畫像

可成寺の所藏、長可君の御畫像、萌黃威の御鎧（扇カ）よて、軍配團ヲ持せらば、敷皮の上ニ御座ましよま、在スうとく勇ニ猛りたひします、上の方ニ贊有り、

一代雄帥世以鬼名

長湫之厄命因義輕

右者天明三癸卯年、二百年の節、小林多仲御使者ニ被遣、其節同人認め置し寫ヲ見當しこよめて、爰ニ記し置也、其節多仲、長可君の御墳よまふて、雪霜ヲ經りよは御墳の、又殊勝よ、落涙よむせふこり、御墳の前よて、鬼武藏と呼させ給ふ事ヲ思ひ出て、

鬼百合やあゝら盛を塚の陰

一美濃國可兒郡帷子庄石原村普傳山真禪寺の、長可君の御菩提寺也と云、即チ長可君の御寄附狀ヲ所持す、御墳墓有り、事の長可君の記中ニ載せて爰ニ略す、御菩提寺御墳墓の事ハ、猶亦識者の説ヲまつ、

〔森家先代實錄〕

○四 播磨

長可君御室

一池田勝入の息女也、長可君御闘死の後、駿州府中城主中村式部少輔一氏へ再縁よて、中村一學出生ち、慶長四亥年七月廿日、四十一歳よして卒去、

安養院殿春林宗茂大姉

天正十二年四月九日

九六九

長可ノ室
中村一氏
ニ再醮ス

天正十二年四月九日

九七〇

中村式部一氏の、翌年七月、於府中卒ス、子息一學一忠に松平氏ヲ被下、松平伯耆守ニ昇進せらる、伯州米子の城主ニ被仰付、慶長十四酉年五月十一日、廿一歳にて卒、米子法花感應寺ニ墓所有り、其時の住持日長上人、追腹勘ケ由、若狹兩人不知、云、

〔花押彙纂〕

部之

森長可

長可ノ花押

○康樂寺文書(信濃)
天正十年卯月五日
附康樂寺宛禁制

○上原準一氏所藏文書(譜姓)
天正十年(子カ)
十二月□九日附遠山左衛門尉宛書狀

○長可、本能寺ノ變ヲ聞キ、越後三本杉ヨリ兵ヲ撤スルコト、天正十年六月八日ノ條ニ、信孝ト絶ツコト、同月二十七日ノ條ニ、信孝ノ老臣齋藤利堯ヲ美濃加治田ニ攻ムルコト、同年是冬ノ條ニ、秀吉ノ命ニ依リ、同國神路ノ遠藤胤基等ヲ攻ムルコト、十一年閏正月十二日ノ條ニ、秀吉ニ應ズルコト、十二年三月十日ノ條ニ、池田元助ト共ニ信雄ノ屬城

天正十二年四月九日

九七一

todas as bandeiras do reino de Minno erão tomadas dos inimigos, e somente ficava a de Simão, q̄ era de hũa cruz mui grãde dourada, & becõcertada, a qual leuãdo diante de si, decendo daquelle teso dõde estaua, arremeteo aos imigos pera passar polo meo delles, & posto q̄ lhe morrerãõ corenta, ou cincoõta soldados, os mais delles Christãos antigos daquellas partes, elle se ouue tem animosamente, que passou polo meo delles, matãdo, & ferindo a muitos, de q̄ lhe ficou grande nome & Faxiba alem de o honrar cõ muitas palauras lhe acrecentou muito arenda, & não foi pequena merce de Deos escapar Simeão polos muitos Christãos, viuuas, & orfãos que pedendem de seu emparo.

Sendo ja acabada esta batalha, chegarão dos reinos de Yechigen, Canga, & Noto perto de trinta mil Soldados em socorro de Faxiba, os quaes elle logo despedio, por não ter necessidade de tanta gente.

大日本史料 第十一編之六終

天正十二年四月九日

尾張犬山ヲ攻メテ之ヲ拔クコト、同月十三日ノ條ニ、同國羽黒ニ家康ノ先鋒ト戰フコト、同月十七日ノ條ニ、遺書ヲ尾藤甚右衛門ニ送リテ後事ヲ託スルコト、同月二十六日ノ條ニ見ユ、

九七二

os quaes cuidando q̄ hião seguros se apartarão algũa distancia hũs dos outros. El rei de Micaua sabio de noite de sua noua fortaleza de Comaquí, & em amanheçendo deu de repente no campo de hum sobrinho de Faxiba, & como hião descuidados, facilmente os desbaratou. Vencidos estes deu logo nos outros que estauão diuididos, & teue com elles aos noue dias da primeira Lũa hum encontro muito forte, & de hũa, & do outra parte morreo grande numero de gente, & entre elles hum dos principaes senhores Christãos que auia naquellas partes por nome Ioão Yuquidono, que de minino se tinha feito Christão, verdadeiro amigo da Companhia, & hum dos intimos filhos que a igreja tinha naquellás partes. Morrerão mais outros muitos Christãos, honrados, & antigos, de cuja morte os padres que os criarão, & os tinham cultiuados tantos annos não podião deixar de ter grande sentimento. O numero da gente que morreo de hũa, & outra parte ainda se não sabe de certeza mas o que ordinariamente dizem he que passarião de dez mil, & a maior parte forão dos de Faxiba em que entrou Iquedaquino Camidono senhor do reino de Minno, & seu genro com outras muitas pessoas nobres. El rei de Micaua auida esta vitoria se tornou a retirar pera a sua fortaleza, aonde logo o Faxiba lhe mandou por cerco com vinte mil homẽs, mandandolhe fazer a roda da sua fortaleza hũas paredes de taipas altas, & cauas profundas em que ali o tem de cerco.

Ouuese nosso Sñor por seruido q̄ escapassem desta guerra as duas columnas principaes de todas aquellas partes Christãs, hum delles foi Vcõdono Iusto, o qual ao dia dâtes da batalha, tinha mandado Faxiba, que fosse dos dianteiros nella, porque sabia bem seu valeroso animo & quam excelente capitão he na guerra: todauia como nosso Senhor o tem guardado pera emparo de todos os padres, & irmãos, & do seminario que tem dentro na sua fortaleza, & da maior parte da Christandade daquellas partes, & pola muita confiança que Faxiba tẽ nos Christãos, especialmente em Iusto polas cousas que delle sabe, tornou a mudar o parecer, & ao dia a noite antes da batalha lhe mandou dizer outra uez q̄ o queria ter por guarda

junto de si, & mandou a outros em seu lugar, os quaes todos morrerão & sem falta nenhũa se la fora Iusto, parece que por nenhũ caso podera escapar de morte. Elle quanto por hũa parte vai crescendo, na priuãça, fama, & opinião, q̄ se delle tem por todos aquelles reinos, tanto por outra se vai mais humilhando, & vnindo com Deos, & tão maior cuidado tẽ das cousas de Copanhia, tanto que estando ainda muito occupado na guerra cinco ou seis dias de caminho de sua casa, mãdou s̄e lhe esquecer, q̄ leuassem pera as obras que o padre Orgãtino fazia na igreja de Vozaca hua boa copia de fardos de arroz, & porque a Companhia estaua necessitada, & não tinham os padres com que poder sustentar a gente, & mininos do seminario, ate de ca destas partes do Ximo o padre Viceprouincial mãdar algũ remedio, mandou que de sua casa, & de sua renda dessem todo o necessario pera o seminario sem falta nenhuma. Em outro encontro de hũa fortaleza q̄ se tomou, na qual foi o dianteiro Iusto, fez nella cousas tão assinaladas, q̄ a todos pos em admiração seu grande esforço, e animoso animo. Escreue hũ padre q̄ passando Iusto com seu exercito pola cidade do Miaco, se deixou ahi ficar na nossa igreja o sabbado antes da dominga de Ramos, e diz. Pamei de o ver tão grande pregador, & de ver sua eloquencia, & zelo de falar de Deos, por q̄ nunca cessa, & he cousa estranha o feruor q̄ tras, disseme q̄ se esta guerra não se aleuantara q̄ dentro de poucos dias, ouuera de fazer quatro senhores nobres Christãos. Esta quaresma passada q̄ esteue desocupado ẽ Tacacçuqui, se ajudou grandemente das cousas de Deos, & de frequẽtar os Sacramentos, acrecentando em sua alma nouas forças, & desejos de seruir ao Senhor.

O sugũdo foi Simeão Yquẽda Tãgodono, o qual na força do desbarate se sobio em hũ teso com obra de trezentos soldados. Os gentios que hião cõ elle, vendo q̄ não tinham remedio por estarẽ por todas as partes cercados cõ mais de tresmil inimigos dizião; aqui não ha outro remedio senão cortar a barriga: Simeão como bom capitão, & verdadeiro soldado de Christo lhes disse q̄ não fisessem tal cousa, mas q̄ morressem valerosamente pelejando. Ia

dans ce país idolâtre comme une rose au milieu des épines. Il luy demanda comment elle osoit porter un chapelet à son côté à la vûe des Bonzes & dans un país où il n'y avoit que des Infidelles. Elle luy répondit en ces termes : *Tout le monde sçait que je suis Chrétienne ; Dieu me fasse la grace que quelque Bonze m'oste la vie, afin que mon ame purifiée dans mon sang s'envole au Ciel & jouisse au plutôt de la vûe de Dieu en la compagnie du saint Pere François qui m'a baptisée. J'aime mieux mourir Martyre pour son saint Nom, que d'attendre la mort couchée dans mon lit : cependant que sa sainte volonté soit faite. Je crains fort que mes parens qui sont tous idolâtres, ne m'enterrent à leur mode. Je les ay priez de n'appeller aucun Bonze à ma mort, & de m'ensevelir avec mon chapelet au côté, & de mettre mon corps au lieu où l'on enterroit autrefois les Chrétiens. Priez Dieu qu'ils executent fidèlement mes volontez. Je ne songe plus au monde : Je ne pense qu'à me préparer à la mort.* Le Frere Damien fut ravi de voir une si grande ferveur & une si grande fermeté dans cette pauvre femme, & il reconnut bien que Dieu n'a point acception de personnes, mais qu'il appelle à la sainteté ceux qu'il luy plaist.

IV.

SEGUNDA PARTE DAS CARTAS DE IAPÃO QUE ESCREUERÃO OS PADRES, & IRMÃOS DA COMPANHIA DE IESUS.

Do que tem acontecido nas guerras das partes do Miaco, conforme ao que nossos padres de la nos tem escrito neste anno de 1584.

[Extract]

Dando pois estas novas a Faxiba, como erão mortos aquelles tres senhores sem saber do mais processo da conjuração coniecturando facilmente o que podia ser com estranha breuidade se partio logo pera o Miaco com determinação de os ir elle buscar, & logo concorreo o exercito de diuersas partes, de modo que quando chegou ao reino de Yxe, que he o principal do filho de Nobunaga : leuava ja consigo setenta mil homes, & começando a entrar pollo reino começou a

cercar as fortalezas do inimigo por força de armas as hya entrando, ate finalmente se lhe entregar o reino todo, sem ficar mais que hua fortaleza pola parte do inimigo, aqual se chama Nagaxima. No segundo reino de Inga não teue difficuldade, porque logo se lhe entregou, & dali com grande presteza, passandose pera o reino de Voari se lançou logo cõ elle a fortaleza de Ynuyama, sem a qual nao podia passar a diante, & com a ter por sua, passou todo seu exercito, hum grande, & rapidissimo rio, q̄ diuide os reinos de Minno, e Voari. El rei de Micaua edificou huma fortaleza tres legoas diante desta em hum lugar, chamado Cumaqui & ali assentou seu arrial com passante de vinte mil homēs, & o filho de Nobunanga se pos em outra cõ sua gente no cabo do mesmo reino de Voari. Passado o exercito se foi Faxiba com elle marchando, sogeitando algũas fortalezas, & lugares, do caminho ate se por mea legoa, donde estaua elrei de Micaua.

V.

SEGUNDA PARTE DAS CARTAS DE IAPÃO QUE ESCREUERÃO OS PADRES, & IRMÃOS DA COMPANHIA DE IESUS.

Do que tem acontecido nas guerras das partes do Miaco, conforme ao que nossos padres de la nos tem escrito neste anno de 1584.

[Extract]

Querendo Faxiba meter parte de seu exercito polo reino de Micaua que esta pegado com o de Voari : concertouse com algũs capitães de certas fortalezas que se lançassem cõ elle : os capitães das quaes auisando disto ao rei de Micaua seu Sñor ; elle lhes mandou que com dissimulação se lançassem com elle, pera q̄ desta maneira com mais seguridade metendose o exercito de Faxiba polo seu reino dentro, elle lhe podesse sair, & acolhêdoos no meo desbaratalos, & assi foi porque peitandolhe Faxiba grande copia de ouro & prata ; elles lhe prometerão que lhe entregarião as fortalezas. Faxiba confiado nelles mandou algũs capitães com quatorze ou quinze mil homēs,

tenoient rang d'Evêques parmi les idolâtres. Le Roy leur fit dire qu'ils eussent au plutôt ou à se convertir, ou à sortir du Royaume. Ils se firent instruire & baptiser. Il y en avoit un entr'autres nommé Minxi d'une si haute reputation dans le païs, que lorsqu'il alloit à la Cour, le Roy même avant que d'estre Chrétien, se levioit pour le recevoir & luy cedoit sa place. Après avoir esté bien instruit, il fut si persuadé des veritez de nostre Religion, qu'il estoit hors de luy-même lorsqu'il consideroit la grace que Dieu luy avoit faite de l'éclairer de ses lumieres. La veille de son Baptême il fit porter à l'Eglise les livres qui contenoient les mysteres les plus secrets de sa profession & l'art de magie qu'ils enseignoient, & ayant allumé un feu, il en fit un beau sacrifice à Dieu.

Il fut nommé Jean & convertit sa maison en un Hermitage qu'il appella l'Hermitage de Nostre-Dame, pour y passer le reste de ses jours. Il avoit fait sept fois le voyage fameux dont nous avons parlé, pour faire penitence de ses pechez. C'est luy qui donna une connoissance plus parfaite aux Peres de la Secte abominable des Xamabugis & du pelerinage qu'entreprenoient ceux qui alloient adorer le Diable. Il fut le reste de ses jours un Chrétien tres-zelé, & il disoit qu'il experimentoit avec un plaisir incroyable la difference qu'il y a entre le joug aimable de JESUS-CHRIST & la tyrannie que le Demon exerce sur ses esclaves. Après cette victoire on baptisa dans un an plus de mille personnes dans ce Royaume.

Pendant que l'armée Chrétienne combattoit celle de Riozogi, les trois enfans de Dom Barthelemy Roy d'Omura souvenoient un combat bien plus dangereux dans le Palais de ce Tyran : car on fit tout le possible pour leur faire perdre la Foy & l'innocence. Dom Sanchez qui estoit l'ainé fut celuy qui fut plus fortement tenté : Car les Seigneurs & Gentilshommes Payens l'attaquoient, les uns par raisons, les autres par promesses, jusqu'à luy faire esperer une des filles de Riozogi en mariage : Mais il leur dit à tous qu'il perdrait plutôt la vie, que de renoncer la Foy Chrétienne. Ces Infidelles ne pouvant gagner son esprit, taschoient de débaucher son cœur. Ils estoient surpris de voir un jeune Prince si sage & si modeste, que personne

n'eût osé dire une parole messeante en sa presence. Quoy qu'ils pussent faire pour le corrompre, il conserva son innocence au milieu de cette Cour débauchée, comme un autre Joseph en celle d'Egypte. Enfin ils tâcherent de leur faire manger à tous trois de la viande aux jours défendus par l'Eglise : mais ils aimèrent mieux souffrir la faim que de violer ses commandemens. Ils avoient leurs heures réglées pour prier Dieu, pour faire leurs devotions & pour examiner leur conscience, comme s'ils eussent esté dans le Palais de leur pere, & les Pages qu'ils avoient avec eux gardoient le même ordre fort exactement. Ils édifierent si fort cette Cour infidelle, que le troisième fils de Riozogi qui estoit âgé de vingt-deux ans, prit resolution de se faire Chrétien : mais ayant appris la mort de son pere, il en fut si vivement touché qu'il en perdit l'esprit.

En ce même temps mourut Dom Michel Seigneur d'Amacusa un des meilleurs Chrétiens qui fût dans le Japon. Lorsqu'il se vit dangereusement malade, il assembla sa femme, ses enfans & tous ses parens & leur fit un discours fort touchant, pour les exhorter à conserver la Foy & à garder inviolablement les Commandemens de Dieu. Ayant receu les derniers Sacremens, il demeura toujours en prieres tenant les mains jointes, jusqu'à ce qu'il fût prest à rendre son esprit : car alors levant la main au Ciel, il dit : *Je m'en vay,* & ayant prononcé ces paroles il mourut. On l'enterra fort magnifiquement. La Dame son épouse donna ce jour-là à dîner à plus de mille pauvres & fit vendre ses vétemens les plus précieux, dont elle employa l'argent en aumônes.

Riozogi estant mort, le Roy François recouvra le Royaume de Chicungo qu'il luy avoit enlevé, & le Roy de Saxuma une partie de celui de Fingo. Le Pere Gaspar Cuello Superieur du Japon envoya le Frere Damien feliciter le Roy de Saxuma pour ménager son affection envers les Chrétiens. Le Roy luy promit de leur estre toujours favorable. Il estoit alors à Cangoxuma où saint François Xavier prit terre arrivant au Japon. Le Frere Damien trouva là une femme Chrétienne nommée Marie, qui avoit esté baptisée par le même Saint trente-six ans auparavant & qui s'estoit conservée

fussent icy pour rendre ma victoire plus considerable. Ayant dit cela il fait filer une partie de ses troupes le long de la montagne. L'autre gagne le rivage de la mer. La troisième tire droit à Ximabara. Son dessein estoit d'envelopper les assiegeans, afin que pas un ne luy échapast.

Dom Protais voyant cette armée & l'inégalité de ses forces, ne perdit pas pourtant courage : mais se confiant en Dieu, il attend l'ennemy de pied ferme. Il fait embarquer deux pieces d'artillerie avec quelque infanterie, pour incommoder ceux qui bordoient le rivage. Puis laissant de bonnes troupes devant la forteresse pour empescher les assiegez de sortir. Il marche à la teste de sept mille hommes au devant de Riozogi. Il faisoit beau voir dans ce petit corps d'armée soixante drapeaux de Chrétiens marquez du victorieux signe de la Croix.

Pendant qu'on se prepare au combat on faisoit des processions & des prieres continuelles dans Omura & dans Arima, pour le succès de cette journée d'où dépendoit tout le bien de la Chrétienté de ces deux Royaumes. Il commença le 24. d'Avril de l'année 83. sur les huit heures du matin & dura jusqu'à midy, sans pouvoir juger de quel costé tourneroit la victoire. Dans le premier choc l'avant-garde de Riozogi donna de telle furie sur les gens de Dom Protais, qu'elle les fit reculer jusqu'à leurs tranchées. Mais le jeune Prince avec le General des Saxumans leur reprochant leur lâcheté & les exhortant à mourir plutôt qu'à lâcher le pied, ils reprirent courage, & l'épée à la main forcerent les premiers rangs des ennemis, tuant tout ce qu'ils rencontroient à droite & à gauche, sans leur donner le temps de recharger leurs mousquets.

D'autre part l'artillerie du Roy d'Arima qui étoit sur les vaisseaux & qui tiroit à cartouches sur les ennemis qui bordoient le rivage de la mer, faisoit des escarres horribles dans les bataillons. Elle estoit si bien servie, qu'elle ne tiroit point de coup qu'elle n'enlevast vingt ou trente des ennemis, ce qui les mit en grand desordre. Cependant comme ils estoient deux contre un, ils revenoient à la charge & souteñoient ceux qui plioient devant les tranchées.

Les choses estoient ainsi en balance sans qu'on pût dire qui auroit l'avantage, lorsqu'un Capitaine de Saxuma voyant Riozogi qu'on portoit en litiere, resolu de vaincre ou de mourir. Il commande à ses gens de le suivre, & se jettant l'épée à la main au milieu des ennemis, il se fait un chemin sur les corps morts qu'il abattoit à ses pieds, jusqu'à ce qu'il fût près de la litiere. Riozogi croyant que c'estoient quelques-uns de ses gens qui se querelloient, leur dit : *Il n'est pas temps de vuider vos differends lorsqu'il faut combattre les ennemis. Osez-vous vous quereller en ma presence ? Ne voyez-vous pas que je suis icy ? C'est toy,* répond le Saxuman, *qui je cherche.* Alors il se jette sur ceux qui le portoit, & en ayant tué quelques-uns, Riozogi tombe à terre. Le Saxuman se saisit aussi-tost de luy avant qu'il eût le temps de se relever & d'un coup de sabre luy tranche la teste.

En même temps un cry s'éleve que Riozogi estoit mort. Ses gens épouvantez ne songent plus à combattre, mais prennent là fuite & se retirent en desordre. Les vainqueurs les poursuivirent une lieuë loin, & couvrirent la compagne de corps morts de ces fuyards. Après cette victoire Ximabara se rendit, & les cinq mille hommes qui estoient dedans en sortirent la vie sauve. Ainsi Dom Protais conserva son Royaume & Dom Barthelemy retira ses trois enfans qui estoient en ostage. L'un & l'autre sentit l'effet de la protection de Dieu, & tous les Chrétiens en rendirent des actions de graces.

Mais entre tous Dom Protais fit éclater sa pieté & sa reconnaissance. Il avoit payé de sa personne Royale dans ce combat & fait l'Office de grand Capitaine, rangeant son armée en bataille, se saisissant des postes avantageux, plaçant & faisant jouer son artillerie, animant ses gens lorsqu'ils lâchoient le pied, se trouvant par tout pour donner les ordres & se jettant luy-même dans la meslée : Cependant après la défaite des ennemis il confessa hautement que c'estoit à Dieu seul qu'il estoit redevable de cette victoire. C'est pourquoy il entreprit avec plus de zele que jamais d'exterminer les restes de l'idolâtrie dans son Royaume.

Il y avoit encore huit ou dix Bonzes dans Arima, deux desquels

mas assi como em todos os sesenta & seis reinos de Iapão, não ha maiores observadores do culto, & veneração dos idolos, & polo consequente do mesmo demonio, que os deste reino de Sacçuma, assi tambem particularmente são os maiores imigos, & contraditores, que a lei de Deos tem em Iapão, & por serem filhos de tal pay, & discipolos de tal mestre, como he o diabo, & em tudo se regerem por Bonzos, & feiticeiros, daqui lhes veo desdourarem facilmente tudo o que tinham feito, & escurecerem muito sua fama com os desatinos, que acabada a guerra fizerão, porque primeiramente pretenderão, fazendo nisso instancia, que dom Protasio tornasse atras persuadindolhe que seus idolos forão causa desta victoria, mas acharão nelle diferente reposta, do que esperauão. Acrecentarão depois mais del rei de Sacçuma, & Nacazucasa seu irmão tinham feito hum voto solene aos Camis, & Fotoques de reedificarem hum muito sumptuoso templo de grande romagem em Iapão que estaua tres legoas ariba da fortaleza de Arima em huma serra, & lhe tornarem a restituir toda a renda que tinha neste mesmo Taçoquu, & que ja que dom Protasio era Christão, & parecia que não se queria ocupar na reedificação dos templos dos gentios, que a gente de Sacçuma por respeito do voto, tomava o assumpto deste trabalho mas que pera os gastos, & commodidades das obras lançauão por agora mão das fortalezas de Ximabara, & Miye com suas rendas, & das milhores cousas que ha no Taçoquu: dom Protasio por se achar com pouco poder não se atreueo a lhe negar isto, mas seu intento he (& assi ha ja muito tempo que de seu proprio moto fez hum solemne prometimento a Deos) de não permitir em todas suas terras idolatria de sorte alguma. Descobrirão mais os de Sacçuma seu impio coração, com queimarem algumas cruzes, & fazerem outras injurias a algumas igrejas, mas isto não muito manifestamente, antes quando se nisso fala aos gentios de Sacçuma, dize que tem estas cousas desagradado a el rei, & que elle com recados asperos mandara reprender alguns mancebos, que nisto interuierão, mas de qualquer maneira que seja, o padre Vice-prouincial determina conformarse com o Euangelho, pola muita experiencia que tem de Iapão, & pagarlhe as injurias com beneficios,

& odio amor, mandando visitar a el rei como amigo, & aos senhores principaes de seus reinos, & assi prazera a nosso Snhor, pois que o reino de Sacçuma, & a cidade de Cangoxima, que he a corte del rei, foi o primeiro lugar onde nosso padre Mestre Francisco de santa memoria primeiro chegou & ali começou a denunciar a lei Euangelica, que ainda que ao presete elles a engeitem, & se mostrem imigos, que polo tempo em diante virão a ser dos que melhor aguardem, & disto temos ja experiencia, que alguns Christãos, que ao longo do mar são feitos na costa do reino de Sacçuma conuertem facilmente a deuação que tinham a seus pagodes em melhor culto, & veneração, & mais inteira fe nas cousas de Deos que outros, & ainda temos em Cangoxima como somente a casa que ali deixou feita o padre Luis Dalmeida que Deos tem, por estar ategora por nossa.

III.

P. CRASSET, HISTOIRE DE L'EGLISE DU JAPON.

PARIS, M.DC.LXXXIX. TOM I. LIVRE VIII.

Pp. 496-500.

L'avant-garde estoit composée de mille Mousquetaires, de quinze cens Piquiers, d'un bataillon de Nanguinates, qui sont gens armez de pertuisanes ou hallebardes & d'un autre d'Archers qui estoient soutenus d'un gros de cavalerie. L'arriere-garde estoit de huit mille Mousquetaires & d'un gros bataillon de Piquiers qui conduisoient quelques pieces d'artillerie, plusieurs machines de guerre, grande quantité de munitions & des richesses sans fin.

Riozogi se faisoit porter sur une litiere à bras au milieu de son armée, accompagné de quinze ou vingt Bonzes, entre lesquels il y en avoit un d'une grande reputation, parce qu'on disoit que toutes les nuits il avoit des conferences avec le Diable. Le Tyran estant arrivé sur une colline, d'où il decouvroit la forteresse de Ximabara, & l'armée des assiegeans, fut un peu de temps à les considerer: puis éclatant de rire: *Est-ce pour cela, dit-il, que je me suis mis en campagne? Je voudrois que toutes les forces d'Arima & de Sacçuma*

nenhum caso darião as vidas aos trezentos Christãos de Vomura, que erão quasi todos pessoas nobres, & os principaes das terras de dom Bertolameu, mas pera nosso Senhor acabar nesta tam miraculosa victoria de dar a entender aos Christãos a prouidencia, & particular assumpte que tem delles, deixando aqui de dizer muitas cousas que requerião longo processo: finalmente os Christãos nenhum delles foi morto, nem catiuo, nem lhe tomarão suas armas, & caualllos, antes fora de toda a espectação humana os libertarão, que se fossom embora, & ainda lhe fizerão alguns fauores, que não tiuemos por menor beneficio de Deos, que qualquer dos passados.

Os da fortaleza de Fucaie, que esteue fortissima, & inexpugnauel, fugirão todos, & ja de ca se lhe tem posto fogo. Foise continuando como processo da victoria em todas as mais fortalezas do senhorio de dom Protasio, que contra elle se tinhão leuantado, & ja todas pola bondade de nosso Senhor em breues dias se acabarão de reduzir, & de se lhe sogeitarem. A fortaleza de Vno, que he das derradeiras da jurdição do Tacoquu, não era o capitão della muito rico, quis sua ventura, que por Tacanobu auer por ali necessariamente de passar por lhe parecer lugar seguro, & conueniente, fez daquella fortaleza sua recamara, almazem, & despensa, mandou ali depositar muita quantidade de poluora, & duas peças dartelharia, mil fardos de arroz, muito numero de ganchos ne ferro como vnhas, pera com elles desfazer as tranqueiras, & paredes dos arraiaes, & todos os cestos, & caixoes que erão muitos de seus vestidos, & de seus filhos, armas, & mais petrechos, tudo ali depositou, & como Tacanobu morreo aleuantouse logo Vno, & lançouse com dom Protasio, que era seu verdadeiro senhor, & ficouse com o recheo de tudo, o que ali tinhão os inimigos depositado.

O capitão de Ximabara por ordem de Sacçuma se veo pera o lugar de Dozaqui que he huma fortaleza de dom Protasio, & por ser parente muito propinquo seu, parecia que se não esqueceria do beneficio que se lhe tinha feito em se lhe dar a vida, mas ajudouse mal disso, & fugio em duas embarcações pera os inimigos, aonde não foi bem recebido, nem se lhe deu nenhuma renda por

elle ser a causa principal da morte de Tacanobu, e dos mais. Todauia hum seu irmão menor, & outros parentes, que até então não tiuerão oportunidade pera poderem fugir todos forão mortos a espada. Dom Bertolameu se tornou a meter em sua fortaleza, & seu filho dom Sancho quando fugio da guerra com os que escaparão da parte de Tacanobu se foi com hum seu primo, por nome Fatadono aonde ainda está, mas sem nenhum perigo. Os tres filhos de Tacanobu todos ficarão viuos, mas o terceiro (que era melhor caualeiro, que todos, & de mais raras partes, do qual ja o anno passado escreuemos, que desejaua de se fazer Christão, & se mostraua muito affeigoadado as cousas de Deos) logo em tornando da guerra mandou secretamente hum recado a igreja de Nangaçaqui, em que mandaua dizer que por ja ser tirado o impedimento, que era seu pai, elle desejaua de por agora em effeito, o que ja tanto tempo auia trazia no coração, pollo que se era possiuel, pedia lhe mandassem al algum irmão a pregar a sua gente, porque os queria fazer a todos Christãos, & que elle se não apartaria do que tinha prometido. Mas como os juizos de Deos são mui diferentes dos conceitos dos homens, parece que deu tanto lugar a tristeza, & sentimento da morte infelice de seu pai, & do desbarate de tam nobre gente, que totalmente ficou alienado, & priuado de seu juizo, & assi fica ainda agora em huma fortaleza que ficou de seu pay metido em hum tronco com guardas que o vigião.

Com rezão se pinta o diabo com cornos, porque ainda que nas apparencias, & fingida simulação, mostre de fora algum sinal de virtude, não pode no fim, ou no processo de suas obras deixar elle, & os que o seguem de mostrar quem são. Tomado em summa este beneficio, que os gentios de Sacçuma fizerão a dom Protasio parece huma obra espantosa, como foi sendo elles gentios virem de tam longe a sua custa offerecer suas vidas com tam grandes trabalhos, & perigos, somente polo restituirem a seu antigo estado, & com isto ganhauão nome de homens fundados em justiça, & humanidade, & assi apregoauão no principio que hum palmo de terra não querião de dom Protasio, antes seruillo, & ajudalo em tudo o que podessem,

acompanhauão, hum irmão de Tacanobu, & outro do seu capitão geral, & o feiticeiro dos prenosticos da guerra, morrerão mais muitas pessoas nobres, & illustres senhores de fortalezas, & affirmase que somente naquelle campo de Ximabara até Miye, auia passante de dous mil mortos, & que sairão tres mil feridos, dos quaes muitos não podião escapar da morte. Dos de Sacçuma morrerão pouco mais ou menos duzentos & cincoenta, & dos Christãos de Arima alguns quinze ou vinte.

Aconteceo neste comenos em que Nacazucasa tornaua de Miye com a victoria, hum caso estranho, & foi que em hua parte do caminho por onde passaua todo seu exercito lhe saio hum mancebo nobre dos imigos ao encontro, o qual intrepido disse aos soldados que o não matassem porque leuaua ao irmão del rei de Sacçuma hum recado de muita importancia. Nacazucasa deixou estar quedo no caualo em que vinha, & fez arredar os seus pera ouuir o mancebo, o qual leuou de repente da espada que tinha cingida, & deu a Nacazucasa duas feridas huma em hum braço, & outra no peito do pe, acodio logo muito a pressa seu filho, que dizem matou a este mancebo com a mas gente, que o acompanhaua, mais se mais tradarão hum pouco ali ficaua o vencedor vencido.

Eis aqui irmãos carissimos a triste, & desauegurada sorte do tyranno Tacanobu, que assombraua todos estes reinos, & parecia na opinião dos seus, exaltatus ficut cedrus Libani, & transiuimus, & ecce non erat, sua cabeça foi logo posta junto das tranqueiras de Ximabara, aruorada em huma lança, & depois leuada em presente pera ser vista del rei de Sacçuma.

Deixo nisto de contar grande numero de cousas, que ordinariamente em semelhantes tragedias acontecem, & tratarei hum pouco da alegria, que das tais nouas se recebeo. Estaua o padre Reitor do seminario vigiando de noite a fortaleza de Arima, sem até então se saber nem que Tacanobu era chegado a Ximabara, nem que se tinha com elle dada batalha campal. Acabando de rezar, & querendo de noite repouzar hum pouco, senão quando chegão dous Christãos suando, esbofados como dizem a fortaleza a dar estas nouas ao padre,

& por serem tais, que quasi as não cria, mas fazendolhe muitas perguntas, & elles affirmando mais & mais o que dizião, começaramse a repicar os sinos, aluoraçarse a gente, abriremse as portas, e janelas, correrem as tochas acesas de huma parte pera a outra, que parecia confundirse Arima com alegria. O padre Reitor se partio logo por arezoado escuro com hum irmão, & quatro, ou cinco Christãos com toda a pressa possiuel a dar estas nouas ao padre Viceprouincial, & aos mais que então estauamos com elle em Cochinoçu mais ocupados de temor, & de tristeza, que de poderem imaginar tão extraordinarias nouas onde chegou as tres horas depois da mea noite, ja verão com que gosto podião ser recebidas taes nouas, por serem tam pouco esperadas, parecia mais fabula, ou sonho que realidade da cousa: humas vezes o criamos, outras ficuamos suspensos, não falo no repicar dos sinos, & alegria de todos aquelles Christãos, que a cada passo esperauão pola morte, mas amanheceo logo o dia tam sereno, & gracioso, & os campos tam verdes, & rociados que parecia representarem em huma certa maneira até as creaturas insensiuéis outra Pascoa em fazimento de graças ao Autor de todo o bem, de tão grande, & extremo perigo como foi o de que Deos por sua infinita clemencia liurou toda esta Christandade do Taçoquu, & Vomura que ja quasi estaua na garganta deste lobo infernal, & cruel tyranno.

A fortaleza de Chigiua, que como disse atras he huma das duas chaues deste Taçoquu, dahi a dous dias se despejou, & os de Tacanobu que nella estauão fugirão, & dahi a mui poucos dias foi residir de assento nella dom Esteuão, irmão de dom Protasio, cuja era esta mesma fortaleza quando a Tacanobu tomou.

Como o capitão de Ximabara gentio como erão todos os outros aleuantados se vio em tamanha fraqueza: tratou logo de concertos com Sacçuma, offerecendo que entregaria Ximabara se a elle, & aos seus lhe dessem a vida, & assi logo so concluiu: huma cousa se offereceo nisto de que padre Viceprouincial estaua com estranho sentimento, & angustia, que era parecerlhe como todos cuidauamos, que ainda que se tratasse destes concertos, que os de Sacçuma por

vitoria mas morrerem todos com tanto esforço que delles ficasse em Iapão eterna memoria. A suma do que lhes mandou dizer, foi que olhassem todos os seus como nas costas não tinham mais que o mar, pera o qual não podião fugir: defronte de si vinte, & cinco mil homens, dos quais grande parte ainda não tinham começado a pelear, polo que somente lhes lembrava, ia que de necessidade parecia auerem todos de morrer, que o não fizessem de maneira que o nome de Saccuma ficasse apagado com couardia, & como tais arremettessem intrepidos, & sem nenhum temor. Ainda as palauras não erã ditas, quando todos como se de nouo começarão, sairão ao encontro dos inimigos de tal maneira, que parecia então se começar a batalha, & dizião os gentios de Saccuma aos Christão criados de Dom Protasio, vos outros arremetei, & chamai polo nome de IESVS MARIA. Tacanobu, & os seus os receberão com não menos promptidão, & o mesmo Tacanobu lhes dizia alegremente, que não auia que temor pois tinham muito mais gente forças, & munições pera alcançar a vitoria, traouse a batalha tão brauamente, que as lanças de huma, & da outra parte ia não tinham lugar pera se enrestar, & cortando se metião por ellas os de Saccuma como se as não tiuerão diante de si. Cessarão as espinguardas que ia não auia lugar pera se carregarem, em cujo lugar os de Saccuma se ajudauão grandemente de arcos, & frechas, nos quais erã mui expeditos, exercitados, do que os inimigos erã não pouco molestados. No maior feruor da batalha hum capitão de Saccuma com alguns dos mais valentes soldados, desuiandose acaso dos outros, & adiantandose por algum espaço se acharão alem do palanquim em que vinha Tacanobu, & começarão ali a pelear. Tacanobu cuidando que se leuantava detras alguma briga entre os seus disse com voz alta, não he isto tempo de peleardes hums com os outros como? não sabeis que vem aqui Tacanobu? Neste comenos os que o leuauão as costas o tinham largado, porque os picauão rijamente, & em se elle aleuantando, que o ouiu nomear o capitão de Saccuma mancebo por nome Cauacami Sequeodono, arremeteo a elle dizendo, a vos vinhamos todos buscar, & lhe deu hua lançada, a qual elle recebeu com bem pouca alegria, & com as

maõs leuantadas não pera o Criador dos ceos, mas chamando Namuamidabut (que he a suprema inuocação de seus idolos) logo immediatamente polo mesmo que lhe deu a lançada lhe foi cortada a cabeça.

Diulgada a morte de Riuzoij Tacanobu logo todo seu exercito cheo de medo se desordenou, & começarão todos virar as costas, & fugir com grande pressa, deixando não somente as armas, mas ainda os vestidos, pera mais ligeiramente escaparem dos imigos, os quaes brauamente hião apos elles, sobre os derribados, & os feridos, & mortos, e porque o temor vrgente acrecenta azas as pessoas em semelhantes pressas, & toda a maneira de cousa pesada he onerosa, & graue, pera passar hum naufragio tam acelerado, começarão a fazer jactura das cousas que leuauão, & não digo en largarem logo lanças, & espingardas, arcos, & frechas, armas ricas, & capacetes dourados, mas porque o furor dos gritos que ouuião detras lhe representava a imagem da morte diante, largauão as espadas, & adagas, & o que mais he pera ficarem expeditos lutadores, alguns hião despindose de maneira, que ficauão nus, & assi comião que parecião veados, & tal ouue que matou o caualo de lhe cair no chão de puro cansacio: mas por que os de Saccuma estauão ja mui cansados, & tambem feridos não poderão seguir o alcance de seu triumpho, & felice victoria mais que huma legoa grande, que ha de Ximabara até a fortaleza de Miye, em cujos caminhos, campos, & varzeas, não se via senão corpos mortos, sangue, feridas crueis, vozes tristes dos que acabauão de espirar, & os despojos da guerra, que erã alguns delles de preço como treçados, & adagas guarnecidas de ouro, que não dauão aos vencedores pequeno aliuio de seu passado trabalho. Quasi a maior parte da gente que ficou morta no campo era nobre, como bem significauão as insignias do que trazião, e a gentileza, & brancura de seus corpos. De Nangaçaqui nos escreuerão, que polo caminho de Vomura, & por outras muitas partes passava grande numero dos feridos, mas pola graueza das dores, & as feridas serem mortaes, polos mesmos caminhos hião a cada passo morrendo. Ali morreo aquelle grande Bonzo, com todos os mais Bonzos, que o

dous pera se irem meter pello meo das espingardas, & ali acabar, se abraçarão os seus com elles, & por força os retiuerão.

Começouse a trauar a batalha as oito horas da sesta feira pola manhã, vinte & quatro de Abril, vespora do glorioso Euangelista são Marcos, & durou até depois do meodia. Passada a primeira salua da espingardaria, tiuerão por espaço de huma hora hum forte encontro de lanças em que de hua parte, & outra se pelejaua com grande esforço & valentia, mas como por entre as lanças os de Tacanobu se ajudauão grandemente das espingardas, & o numero da sua gente era mui deproporcionado foi o impeto de maneira, que fizerão recolher aos nossos até os meterem dentro das suas tranqueiras. Ao longo da praia vinhão dous filhos de Tacanobu com outros capitães nobres com mui lustrosa, & bem ordenada gente, acertarão de estar, como acima disse, as duas peças da artelharia na embarcação em que estaua o regedor de Arima dom Ioão muito bom Christão tio de dom Protasio, & outros fidalgos honrados: estes começarão por boa ordem a disparar os tiros, & como a gente era muita empregauão bem os pilouros. Mas era pera ver a ordem que tinham, por que a primeira cousa que fazião era postos de giolhos deuotamente com as mãos aleuantadas ao ceo começarem a oração do Pater noster, dizendo: Pater noster qui es in caelis: Sanctificetur nome tuum, & apos isto disparauão as peças d'artelharia, com as quais grande copia de capacetes appareião polos ares voando feitos em pedaços. Acabado isto, deuotamente se tornauão a por de giolhos, dizião outra petição do Paternoster, aqual acabada disparauão outra vez, & deste modo fizerão tanta perda, que desordenandose aquelle corno da praia, por serem dos tiros tam graueamente molestados, parte d'elle se pos em fugida, & parte se foi ajudar com o esquadrão que vinha polo meo. Chegandose os inimigos perto dos lados de dom Protasio, & seu irmao que os vinhão cometer com lanças, sairão logo, & pelejarão com elles tam sem medo, que os de Saccuma se espantauão, por serem ainda ambos mancebos, não robustos, nem até aquelle tempo exercitados em tam vrgentes perigos, & cruel batalha; & com isto,

& outras cousas insignes que fizerão acrecentarão grande opinião, & conceito de seus nomes nos corações de seus vassallos, & dos gentios de Saccuma que o ajudauão. A dom Protasio derão algumas espingardadas no celada, & armas, sem o ferirem: a outro mancebo soldado Christão lhe deu hum pelouro de perto em hum singidouro de seda que leuaua, & ali lhe cahio o pelouro aos pes sem o ferir.

Hua cousa se offereceo nesta guerra dina de notar, acerca da felicidade dos Christãos, & amor que tinham a dom Protasio, porque o capitão, & senhor de Ximabara era gentio, & a maior parte dos seus, mas auia dentro mais de trezentos Christãos, que erão dali mesmo naturaes. Estes reuezendose ocultamente em hum altazinho, que na casa de hum destes Christãos estaua feito: ali dizem que fazião de dia & de noite sua oração pedindo a Deos quisesse dar victoria a dom Protasio, que era seu verdadeiro senhor, & quando diante dos outros gentios sahião as tranqueiras a pelejar, tinhãose falado entre si, que nenhum delles metesse pelouro na espingarda, & somente representassem personagem como de quem pelejaua.

Tornarão outra vez os inimigos a cometer as tranqueiras, & os de Saccuma lhe sahião, mas ja alguntanto cansados, & nas armas estauão totalmente ao reuez dos inimigos, porque os de Tacanobu tinham muitas espingardas, poucos arcos, lanças compridas, & treçados curtos: & os de Saccuma polo contrario poucas espingardas, muitos arcos, lanças curtas, & os treçados muito compridos: & como sempre os inimigos vinhão de frescos, & com nouas forças, & se descubria cadauez maior numero d'elles, & tinham por tres vezes metidos os nossos em suas tranqueiras: chegarão os de Saccuma ao estremo perigo, mas tirando forças de sua fraqueza determinarão intentar outra uez a duuidosa fortuna daquella batalha, pera cujo effeito Nacazucasa, irmão del Rei de Saccuma subio em hum caualo pera ser visto de todos os seus, & por outro capitão que tambem hia a caualo lhe mandou fazer huma breue exhortação como em semelhantes tempos os esforçados capitães costumão pera acrecentar o animo aos debilitados soldados, & pera o mesmo effeito se pos no mais eminente perigo da guerra leuando seu filho consigo, não pretendendo ia quasi

olhauõse hums pera os outros, tremiãolhe os beiços, & barbas, & vinhãolhe suores de morte. O exercito de Tacanobu se diuidio em tres partes, huma vinha ao longo da serra, outra pelo caminho ordinario, & a terceira ao longo da praia: & quanto esta vista enchia de terror, & espanto os olhos, & coreções dos nossos, tanto era chea de contentamento, & alegria aos da fortaleza, que estauão cercados. Tacanobu vinha no meo de seu exercito em hum palanquim, que trazião seis homems, & pondo se em hum tezo alto pera descobrir com a vista os arraiaes dos nossos, & vendo a pouca gente que ali auia deu hua rizada, & cheo de sua soberba, & arrogancia disse: não cuidei que me aparelhaua pera pelejar com tão pouca gente, folgara que estiuera aqui todo o poder de Saccuma pera que ao menos a vitoria tiuesse mais nome polos reinos de Iapão onde se contar, & do intimo de seu coração os reputou em nada, & os teue por metidos no punho, & a vitoria por sua, mas Nacazucasa mandou muito a pressa embarcar as duas peças de artilharia na maior embarcação que ali auia, que era do Regedor de Arima, mandandolhe que elle com outros fidalgos Christãos de Dom Protasio se metessem nas embarcações que ali auia na praia, pera que os inimigos as não queimassem, & pera dali com a espingardaria poderem pescaros dequelle corno, que vinhão ao longo da praia. Mandou mais a hum seu capitão grande por nome Firatadono que se posesse na frontaria da fortaleza de Ximabara com mil soldados, pera que no tempo da batalha não saisses os de dentro, & lhes dessem nas costas. E na fortaleza de Andocu onde elle ordinariamente se agasalhaua, que era dali perto de huma legoa, mandou meter quinhentos soldados, que por entretanto a estiuesses guardando.

Antes de se dar o primeiro combate, & salua da espingardaria de Tacanobu, vendo Dom Protasio, que era temeridade, deixarse ficar em tão incomoda estancia como tinha determinando de se ir incorporar, & vnir com o exercito do irmão del Rei, que estaua posto em hum teso, o qual não era capaz de mais gente da que ali os de Saccuma ocupauão, nem auia lugar pera sendo mais,

poderem com expediencia liuremente peleiar, vendo Dom Protasio, que nem auia commodidade pera se recolher em riba nem tempo pera seguramente se poder tornar a sua primeira estancia, descendose ligeiramente pera baixo se deixou ficar ao pe daquelle teso com sua gente offerecido como barreira, ou aluo, aondo de necessidade auia de descarregar sobre elle grande parte da furia de espingardaia, como realmente logo aconteeo, mas a confiança que tinha era no relicairo do summo Pontifice que leuaua ao pescoço, & na sua bandeira de campo com huma cruz grande pintada, & nella o santissimo nome de Iesv escrito em nossas letras.

Neste comenos o exercito de Tacanobu se veo não de qualquer maneira marchando, mas com impeto mui intrepido, & furioso em figura de Luna, & assi cercarão logo os arraiaes de Nacazucasa, & dom Protasio, & primeiro lhe fizerão huma salua de quinhentas espingardas, aqual os nossos receberão mui agachados, & quasi estirados pello chão, esperando que depois de passada lhe sairião ao encontro das lanças como fizerão: & porque os Iapões não vsão de rodela, adargas, nem escudos como nos, & estaua dom Protasio, & seu irmão dom Esteuão em extremo arriscados na frontaria das espingardas: hum fidalgo por nome Bigen Nocamidono lhe pos diante hums dous antiparos de ferro de largura de dous palmos, & de altura, que poderia dar a hum homem pola cinta, em que apenas cada hum delles desguelha se podia emparar, & começando a desparar a espingardaria grossa dos inimigos por hum grande espaço, de modo que parecião os pilouros chuua, que cahia sobre elles, não lhe sofrendo o coração a dom Protasio, & seu irmão estarem tanto espaço encurauados, em se começando a descobrir, & aleuantar logo de repente acertou de vir hum grosso pilouro com tanto impeto, & furia, que acertando a dom Esteuão na testa sobre a celada que leuaua, deu logo com elle redondo no chão. Acodiolhe dom Protasio, & cuidando que era morto o deixaua como tal, mas tornando a ver que se mouia o aleuantou pola mão, & elle tornou em seu acordo milagrosamente sem ferida: & por duas vezes aremetendo ambos de

com elles vsaua, & viuia ordinariamente em delicias nefandas, & em todas as recreações que podia, mas agora como esquecido de suas riquezas, & contentamentos, & o que mais he de sua idade, que por ser de sesenta annos ja parecia que não era pera dar tam singular expediençia as cousas da guerra como por si mesmo lhe deu. Ordenou de se fazer prestes com tanto silencio, & breuidade que totalmente tomasse os nossos sem nenhum modo de aparelho, nem esperança de sua vinda, & assi o fez de maneira, que parecia que nem a diligencia de Iugurtha, nem o cuidado, & prompto animo de Iulio Cesar podia maquinar mais presteza, & intelligencias: & com serem os Iapões naturalmente rotos no silencio, & elle estar muito perto, teue nisto tanta vigilancia, que se não soube se não na quinta feira depois da Pascoa. Dia de são Iorge chegou pola manhã hum mancebo gentio a fortaleza de Arima fugido, dizendo que Tacanobu estaua com todo seu poder ja na fortaleza do Ysafai, & que o dia seguinte, que era sexta feira em amanhecendo sem falta nenhuma determinaua dar nos arraiaes de Nacazucasa, & dom Protasio, & destruilos. Foi este homem logo na mesma noite enuiado de Arima ao arraial, que erão sete legoas, & conforme ao costume de Iapão o tiuerão aquella noite preso, pera saberem se lhes falaua verdade, & sem discrepar hum ponto, assi como lho denunciou aconteeo. A gente de Sacçuma hia cada dia crescendo, & ja neste tempo aueria no arraial com os de dom Protasio passante de sete mil homens. A gente de Sacçuma era mui lustrosa, & expedita pera a guerra, & estauão ainda esperando por mais copia de gente, pera darem o primeiro combate a fortaleza de Ximabara.

A ordem que trazia Tacanobu parece que o diabo aquem elle seruia, lha ensinou, porque vinhão de tal maneira repartidos seus esquadrões, que parecia trazer na mão a traça da arte militar de Europa; trazia consigo vinte & cinco mil homens de peleja, gente mui lustrosa, limpa, nobre, & exercitada na guerra: vinhão com elle seus tres filhos, o morgado, & outros dous: vinha mais hum seu irmão homem illustre na guerra. O seu capitão geral, por nome

Nabeximadono, & dom Sancho filho de dom Bertolameu com outros muitos senhores nobres que o acompanhauão. Trazia na dianteira ou frontaria de seu exercito perto de mil espingardas tão grandes que parecião mosquetes: apos estes vinhão logo atras mil & quinhentas lanças segundo dizião douradas, & atras dellas outro esquadrão de Naginatas, & outros de arcos, & frechas: trazia mais algumas peças de artelharria, ainda que poucas, & logo apos estes outro esquadrão de espingardas como no principio, que por todas dizião ser sete, ou oito mil, & atras estas outro de lanças, &c. Trazia mais consigo a Zasu de Coorazan hum Bonzo muito illustre, & pessoa de grande nome em Iapão com outros quinze ou vinte Bonzos que vinhão com elle inuocando o Demonio, & outro de seu conselho, por nome Xuichigen grande agoureiró, & feiticeiro, doqual se dizia, que cada noite falaua com os Demonios (mas parece que nesta batalha não lhe falarão verdade) arzoadamente inimigo do nome Christão. Vinhão armados, & apercebidos de armas offensiuas, & defensiuas com grande copia de mantimentos, poluora & munições, & todo o mais requisito, & pera darem em breue espaço conclusão a batalha trazião hu grande numero de paos curtos feitiços, de pontas agudas, que determinauão meter nas paredes das nossas tranqueiras pera sobirem por elles como degraos, & entrando os abalroarem logo.

Os de Sacçuma em começando a ver os inimigos, como nem por pensamento imaginauão, que poderia ser tanta copia de gente estauão dissimulados, olhande pera elles como confiados em seu esforço, tendo que lhe seria mui facil podelos em breue espaço vencer, & destruir a todos, mas como virão os campos cubertos, & que de Ximabara até a fortaleza de Miye, que he huma legoa, se não via outra cousa senão esquadrões de soldados, & estes não quaisquer, mas tudo gente muito nobre, & luzida com suas armas mui boas todas douradas, e lanças do mesmo, os capacetes dourados de mil inuencões, as bainhas das espadas, e adargas de muitos dellas douro, & outras de prata, & os soldados, mancebos, & bem despostos, começarão os de Sacçuma a mudar as cores, a fazer rostinhos:

quasi semelhante ao de Anzuchiyama, quando foi pueimada, & assollada. Estaua ali então o padre Organtino com outro padre, & dous irmãos, os quaes recolhendo o fato apressadamente pera se embarcarem determinauão tambem largar a igreja a ventura do fogo, e posto q̄ o padre Organtino de nennhã maneira se queria sair, os Christãos todauia o constrangião, dizendo q̄ ficar ali não era pera mais que pera morrer sem necessidade. Estado a cousa nestes termos, tinha deixado Faxiba hũ capitão com seis ou sete mil homes dentro em hũa fortaleza q̄ se chama Quixinouado, q̄ esta no reino de Inzumi; era o camiho por onde de necessidade os imigos auião de passar, e como não sabião da guarda, que ali Faxiba tinha deixada, fazião mais fundamêto de tomar logo a fortaleza, q̄ de auerem de ter com ella tam forte encontro como tiuerão, & algũ tanto descuidados sahio Mangoichi cõ toda sua gente, & fez nelles tão grãde estrago, que dizem matarem em mui breue espaço passante de quatro mil. E costumando ordinariamête tomar cada hum as cabeças dos que mata pera as apresentar a seu capitão: je de cansados não lhe tomauão mais q̄ as orelhas, & isto era aindo 5. ou 6. legoas âtes de chegar a Vozaca. Mas como erão muitos, & desejauão ajudarse das presas hũa parte dos soldados Nengoros era ja passada diante, a qual quasi estaua a vista de Vozaca, mas como logo soou grandemête o desbarate dos cõpanheiros desacoroçoado, fizerão avolta muito depressa, e ate coxos, mancebos, velhos, & meninos cobrarão tal animo, q̄ as pancadas os hião matando, e se lhe não anoitecera poucos ouuerão de escapar. O capitão mor da armada de Faxiba, que he Christão, por nome Agostinho natural do Miaco, e muito amigo da igreja, tanto q̄ teue noticia desta saída dos inimigos, acodio logo por mar cõ sua armada a vista do Sacay, com obra de sententa ebarcações, & elle vinha em hua q̄ parecia hu galião dos nossos cõ grande numero de mosquetes, e cõ a artelharia, q̄ el rei de Bungo tinha mandado a Nobunaga, & foi dar hũ salto jũto das praias do reino de Inzumij, por õde os inimigos passauão & fez tambẽ nelles boa matança e cõ esta vitoria tornou logo a ficar em paz, & quietação Vozoca. Fois isto hũa

grande misericordia de Deos, & singular beneficio seu: porque na verdade se queimauão a cidade, & tomauão a fortaleza de Vozaca não auia resistencia nos reinos de Çunoqoni, & Cauachi, por Faxiba ter mandado derribar todas as fortalezas, & assi a seu saluo entrauão no Miaco, e es senhoreauão de tudo, e o que mais he acõtecer isto antes q̄ Faxiba perdesse tanta gẽte na guerra, & assi liuron N. S. a Christandade de Çunoconi, do Sacay, e do Miaco, q̄ tudo lhe cahia nas mãos, se Deos não vsara comnosco de tão singular misericordia.

II.

SEGUNDA PARTE DAS CARTAS DE IAPÃO QUE ESCREUERÃO OS PADRES, & IRMÃOS DA COMPANHIA DE IESUS.

Copia de hũa que o padre Luis Froes escreueo de Iapão
pera o padre geral da Companhia de Iesv:
ao vltimo de Agosto de 1584.

Porque este anno de oitenta e quatro socederão neste reino de Figen, que he onde ordinariamente vem a nao da China, algumas cousas em que Deos nosso Senhor mostrou o muito que tem a seu cargo esta noua Christandade do Ximo, que são perto de cem mil almas procurarei dar nouas a vossa Paternidade do successo, assi destas guerras do Ximo, como tambem das que este mesmo anno ouue em o Miaco.

DAS PARTES DO XIMO.

Tacanobu sabendo que neste combate, & batalha campal estaua posto, & ariscado todo seu estado, & que ou nella auia de ficar por absoluto senhor dos reinos de Figen, & Fingo, & com grande nome, & fama, que nesta victoria podia alcançar em Iapão, ou que ali auia de por termino a sua honra, estado, & vida sua, & de seus filhos, determinou de meter nisto todo seu poder, & ainda que era debaixo sangue, & grande tyranno tinha grande copia de ouro, & prata, & era mui temido dos seus polas cruizas, e tyrannias que

DAI NIPPON SHIRYO

(*Japanese Historical Materials*)

PART XI. VOLUME VI.

European Materials

I.

SEGUNDA PARTE DAS CARTAS DE IAPÃO QUE ESCREUERÃO
OS PADRES, & IRMÃOS DA COMPANHIA DE IESUS.

Do que tem acontecido nas guerras das partes do Miaco,
conforme ao que nossos padres de la nos tem
escrito neste anno de 1584.

[*Extract*]

Depois de ser partido Faxiba cõ todo seu exercito como arriba temos dito, os Bonzos q̃ se chamão Nengoros cõ outros, como sabião q̃ Faxiba lhe tinha ma vontade, e q̃ tornando com vitoria auia de dar sobre elles, quizerãose aproueitar do tempo; & ajudarse da occasião q̃ tinhão, & fazendose em hum corpo obra de quinze mil determinarão de sair, & queimar toda a noua cidade q̃ esta edificada ao redor de Vozaca, & tomado a fortaleza tornarem a meter nella de posse o Bõzo, a que Nobunanga teue cinco ou seis annos de cerco sem o poder rēder. Na forteleza, & cidade quasi não auia nenhua gēte q̃ podesse pelejar, ātes toda estaua aberta como cousa que ainda agora se hia edificãdo de nouo. Poserão no caminho quatro ou cinco dias indo deuagar assolando, & queimãdo algũs lugares por onde passauão. A gente q̃ estaua na cidade cada hũ segũdo sua possibilidade punha seu fato, & peças em saluo, largãdo as casas ao fogo, por saberem q̃ não auia de ficar cousa em pe: as ruas dentro na cidade, e os caminhos de fora andauão cheos de ladrões, de maneira q̃ ninguem podia levar cousa na mão, q̃ sendo logo salteado lha não furtassem, & assi hia sendo este sacco das ruas



昭和十一年二月廿八日印刷
 昭和十一年四月二十日發行

(大日本史料第十一編之六奥附)
 豫約價金七圓

編輯兼
 發行所
 東京帝國大學

印刷者
 西濃印刷株式會社岐阜支店

發行所
 東京帝國大學
 史料編纂所

電話小石川(85)七〇二三番

CONTENTS

| | PAGE |
|---|------|
| I. Segunda Parte das Cartas de Iapão que escreuerão os padres, & irmãos da Companhia de Iesus.—Do que tem acontecido nas guerras das partes do Miaco, conforme ao que nossos padres de la nos tem escrito neste anno de 1584. (Cf. <i>Japanese Materials</i> , 3 moon 22 day, TENSHO-XII.) | 1 |
| II. Segunda Parte das Cartas de Iapão que escreuerão os padres, & irmãos da Companhia de Iesus.—Copia de hũa que o padre Luis Froes escreueo de Iapão pera o padre geral da Companhia de IESV: ao vltimo de Agosto de 1584. (Cf. <i>Japanese Materials</i> , 3 moon 24 day, TENSHO-XII.) | 3 |
| III. P. Crasset, Histoire de l'eglise de Japon. Tom I. Livre VIII. (Cf. <i>Japanese Materials</i> , 3 moon 24 day, TENSHO-XII.) | 17 |
| IV. Segunda Parte das Cartas de Iapão que escreuerão os padres, & irmãos da Companhia de Iesus.—Do que tem acontecido nas guerras das partes do Miaco, conforme ao que nossos padres de la nos tem escrito neste anno de 1584. (Cf. <i>Japanese Materials</i> , 3 moon 28 day, TENSHO-XII.) | 22 |
| V. Segunda Parte das Cartas de Iapão que escreuerão os padres, & irmãos da Companhia de Iesus.—Do que tem acontecido nas guerras das partes do Miaco, conforme ao que nossos padres de la nos tem escrito neste anno de 1584. (Cf. <i>Japanese Materials</i> , 4 moon 9 day, TENSHO-XII.) | 23 |

大日本史料第十編之五正誤

| 頁 | 行 | 誤 | 正 | 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|-----|----|----------|----------|-----|-----|------------|------------|
| 目次五 | 一四 | 任助法親王 | 入道任助親王 | 三三七 | 三 | 大半之書物ハ御紛候て | 大事之書物ハ御殘候て |
| 同七 | 四 | 志賀道憚 | 志賀道雲 | 四三一 | 七 | 淡義田 | 談義田 |
| 同十一 | 九 | 大中臣廣忠 | 大中臣慶忠 | 四四七 | 一五 | (舟橋枝賢) | (舟橋枝賢) |
| 同十三 | 三 | 曼殊院良恕法親王 | 妙法院常胤法親王 | 六〇四 | 一一 | 示眼寺 | 示現寺 |
| 八〇 | 七 | 任助法親王 | 入道任助親王 | 同 | 見出シ | 示眼寺 | 示現寺 |
| 九〇 | 四 | 志賀道憚 | 志賀道雲 | 六九七 | 一二 | 假御申沙汰 | 仰御申沙汰 |
| 同 | 九 | (道憚) | (道雲) | 同 | 一三 | 恐々謹言 | 恐惶謹言 |
| 九八 | 七 | (任助法親王) | (入道任助親王) | 七一〇 | 九 | 曼殊院良恕法親王 | 妙法院常胤法親王 |
| 一六五 | 二 | 大中臣廣忠 | 大中臣慶忠 | 七一八 | 一四 | 六波羅密寺 | 六波羅密寺 |
| 一六六 | 二 | (大中臣廣忠) | (大中臣慶忠) | 七三六 | 一 | 糾問 | 題目 |
| 一九二 | 一一 | 西片房家 | 西方房家 | 八二六 | 見出シ | 森勘勘由 | 森勘勘由 |
| 二〇五 | 一二 | (近江栗太郎) | (近江栗太郎) | 八四八 | 見出シ | 山田信直 | 山高信直 |
| 三三七 | 一 | 祕傳をも | 祕傳々々 | | | | |

六四〇 一一訂 五月六日以下ヲ飢ル 同 見出シ 三條氏 細川氏

大日本史料 既刊目錄 大日本史料 大日本古文書

| | | | |
|-----------------|---------------------|---------------------------------|--------|
| 第一編(平安時代) | 第一卷至第九卷 | 宇多天皇 仁和三七年八月ヨリ 村上天皇 天曆七年七月ニ至ル | 九冊 |
| 第二編(平安時代) | 第一卷至第五卷 | 一條天皇 寬和二年六月ヨリ 寬弘四年十一月ニ至ル | 五冊 |
| 第三編(平安時代) | 第一卷至第七卷 | 堀河天皇 應德三年十一月ヨリ 長治二年正月ニ至ル | 七冊 |
| 第四編(鎌倉時代) | 第一卷至第十六卷 | 後鳥羽天皇 文治元年十一月ヨリ 仲恭天皇 承久三年七月ニ至ル | 十六冊(完) |
| 補遺(別冊一) | 建久四年正月ヨリ 建仁三年十二月ニ至ル | | 一冊 |
| 第五編(鎌倉時代) | 第一卷至第十一卷 | 後堀河天皇 承久三年七月ヨリ 後條天皇 曆仁元年九月ニ至ル | 十一冊 |
| 第六編(建武中興及南北朝時代) | 第一卷至第廿七卷 | 後醍醐天皇 元弘三年五月ヨリ 後光厳天皇 正平二年四月ニ至ル | 廿七冊 |
| 第七編(室町時代) | 第一卷至第六卷 | 後小松天皇 明德三年閏十月ヨリ 應永十一年十二月ニ至ル | 六冊 |
| 第八編(室町時代) | 第一卷至第十七卷 | 後土御門天皇 應仁元年正月ヨリ 文明十七年十二月ニ至ル | 十七冊 |
| 第九編(室町時代) | 第一卷至第四卷 | 後柏原天皇 永正五年六月ヨリ 同十年十二月ニ至ル | 四冊 |
| 第十編(安土時代) | 第一卷至第四卷 | 正親町天皇 永祿十一年八月ヨリ 元龜元年九月ニ至ル | 四冊 |
| 第十一編(桃山時代) | 第一卷至第六卷 | 正親町天皇 正十年六月ヨリ 同十二年四月ニ至ル | 六冊 |
| 第十二編(江戸時代) | 第一卷至第卅二卷 | 後陽成天皇 慶長八年二月ヨリ 後水尾天皇 元和五年十二月ニ至ル | 卅二冊 |

誤正四之編一十第料史本日大

| 頁 | 行 | 誤 | 正 | 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|------|-----|----------------------|---------|-----|-----|----------------|---------|
| 目次一八 | 一五註 | 院德 | 院德 | 六八二 | 一註 | 院芳春 | 院德 |
| 一三 | 五 | 筑後 | 筑前 | 六八九 | 六註 | 五月是月以下ヲ削ル | 院德 |
| 一四〇 | 九 | 勢後 | 勢茂 | 六九三 | 一註 | 五月是月 | 六月六日 |
| 一五一 | 一〇 | 追討 | 追討 | 七一七 | 二註 | 藤平 | 藤井 |
| 二二四 | 見出シ | 秀政 | 秀政 | 七一九 | 一四 | (久信) | (久信) |
| 三六四 | 二 | (殿院淺井氏) | (院院淺井氏) | 同 | 見出シ | 久信 | 久信 |
| 三九五 | 六 | 二十一日 | 十一日 | 七五三 | 二 | 二日 | 一日 |
| 四六七 | 七 | 江ノ上ニ入行野ヲ移ス | 八月二十八日 | 八一二 | 一二註 | 八月是月 | 八月二十四日 |
| 五五二 | 七註 | 九月是月 | 八月二十八日 | 八一三 | 一二註 | 八月是月 | 八月二十四日 |
| 五七九 | 三 | ナホ信雄以下二行ヲ五五三頁六行ノ終ヘ移ス | 八月二十八日 | 八二八 | 六註 | 十二年六月二十日 | 本年七月十一日 |
| 五八八 | 三 | 十日 | 十一日 | 八五六 | 四註 | 及ビ五月二十二日ノ八字ヲ削ル | |
| 六二〇 | 五 | (政慶) | (政廣) | 八七二 | 三 | (芳春院) | (德源院) |
| 六二一 | 一一註 | 四月二十六日 | 正月十三日 | 八九六 | 六註 | 七月是月 | 八月八日 |
| 六二九 | 一一註 | 十月 | 十一月 | 同 | 九註 | 七月是月 | 八月八日 |
| 六三二 | 七 | 註文ヲ削ル | | 九〇六 | 七 | つる者 | つるまゝ |
| 六四〇 | 一一註 | 五月六日以下ヲ削ル | | 同 | 見出シ | 三條氏 | (細川氏) |

大日本史料 既刊目錄

| 編 | 時代 | 第一卷至第... | 冊 |
|------|--------------|-------------------------|--------|
| 第一編 | (平安時代) | 第一卷至第九卷 宇多天皇仁和三 | 九冊 |
| 第二編 | (平安時代) | 第一卷至第五卷 一條天皇寬和二年六月ヨリ | 五冊 |
| 第三編 | (平安時代) | 第一卷至第七卷 堀河天皇應德三年十一月ヨリ | 七冊 |
| 第四編 | (鎌倉時代) | 第一卷至第十六卷 後鳥羽天皇文治元年十一月ヨリ | 十六冊(完) |
| | | 補遺(別冊一) 建久四年正月ヨリ | 一冊 |
| | | 補遺(別冊二) 建仁三年十二月ニ至ル | 一冊 |
| 第五編 | (鎌倉時代) | 第一卷至第十一卷 後堀河天皇承久三年七月ヨリ | 十一冊 |
| 第六編 | (建武中興及南北朝時代) | 第一卷至第廿七卷 後醍醐天皇元弘三年五月ヨリ | 廿七冊 |
| 第七編 | (室町時代) | 第一卷至第六卷 後小松天皇明德三年十月ヨリ | 六冊 |
| 第八編 | (室町時代) | 第一卷至第十七卷 後土御門天皇應仁元年正月ヨリ | 十七冊 |
| 第九編 | (室町時代) | 第一卷至第四卷 後柏原天皇正五年六月ヨリ | 四冊 |
| 第十編 | (安土時代) | 第一卷至第四卷 正親町天皇永祿十一年八月ヨリ | 四冊 |
| 第十一編 | (桃山時代) | 第一卷至第六卷 同 十二年四月ニ至ル | 六冊 |
| 第十二編 | (江戸時代) | 第一卷至第卅二卷 後陽成天皇慶長八年二月ヨリ | 卅二冊 |

大日本古文書

編年文書

第一卷至第六卷 大寶二年十一月ヨリ 寶龜十一年ニ至ル

第七卷(追加一)至第二十一卷(追加十五) 和銅二年ヨリ 寶龜四年五月ニ至ル

家わけ文書

- | | | | |
|----------|--------|------------|--------|
| 第一 高野山文書 | 八 冊(完) | 第八 毛利家文書 | 四 冊(完) |
| 第二 淺野家文書 | 一 冊(完) | 第九 吉川家文書 | 三 冊(完) |
| 第三 伊達家文書 | 十 冊(完) | 第十 東寺文書 | 三 冊 |
| 第四 石清水文書 | 六 冊(完) | 第十一 小早川家文書 | 二 冊(完) |
| 第五 相良家文書 | 二 冊(完) | 第十二 上杉家文書 | 二 冊 |
| 第六 觀心寺文書 | 一 冊(完) | 第十三 阿蘇文書 | 三 冊(完) |
| 第七 金剛寺文書 | 一 冊(完) | | |

幕末外國關係文書

- | | | | |
|---|--------|------|-----|
| 第一卷至第廿一卷 <small>嘉永六年六月ヨリ 安政五年十二月ニ至ル</small> | 附錄之一至四 | 廿一 冊 | 四 冊 |
|---|--------|------|-----|

守贈

1985



2106



